

原始キリスト教の教育思想

松 川 成 夫

ま え が き

キリスト教の教育概念、つまり、キリスト教は教育という文化事象をいかに理解しようとするか、は私が久しく考へ続けてきた問題である。「キリスト教と文化」の関係は、古くから多くの学者によって取上げられ、今日もなお未解決の問題を残しながら探究が続けられているが、私は教育学を専攻する学徒の一人として、「キリスト教と文化」の関係をとくに教育という面から探究してゆきたいと思っている。私にとっては、人間生活のなかでも最も人間的かつ文化的営みであるとされる教育が、一体キリスト教ではどういう地位を占めるかが切実な関心事なのである。

キリスト教が教育を重んじ、キリスト教会が教育事業に特別の努力を払ってきたこと、また古来のすぐれた教育者の多くがキリスト教徒であったことなど、キリスト教と教育の関係を考えてみると、ほとんど例外なく両者間の密接な、積極的な関係が看取されるのである。そこでキリスト教が教育を重要視するに至った理由の根拠として、イエスの最後の命令（マタイ二八・一八―二〇）がしばしば引用され、また、キリスト教では子供を大切にし、尊重するということの論拠として、イエスが幼な子を祝福された記事（マルコ九・三三―三七、マタイ一八・一二―一五、マルコ一〇・一三―一六、マタイ一九・一三―一五、ルカ一八・一一―一七）がよく引用されるのである。けれども、マタイ二八・一八―二〇は実は教会に対する復活の主イエスの命令であり、換言すれば、福音が異邦人の世界へひろめられ、聖霊の導きによって教会が世界的な領域へと発展していった時の、教会の新しい自覚の表現なのであり、しかも、この自覚の根底をなしていたものは、第一義的には終末の待望であった。初代教会の信者たちにとっては、終末時にお

けるキリストの来臨を信じて、ひたすら祈りつつ共に生活することが大切なことであり、個人の自然的成長に関わる教育の問題は、本来的な意味では異質的なものであったということができよう。また、幼な子の祝福の記事も、幼な子がイエスによって模範として示され、祝福されたのは、幼な子のもつ純真、素直、謙遜などの自然的特性の故にではなく、神に対する絶対的信頼や純粋な態度の故にであった点に注目されねばならない。⁽¹⁾ この記事を通して、福音（無償の恩恵）に対する無条件的服従が要求されたのであり、幼な子をその純真、素直、謙遜という特性においてみようとするのは、後代のロマン主義児童観によるものである。

それではキリスト教は本来、教育とか子供というものをどう考えているのか、が問われなければならない。そしてこの問いに対して、イエンチ（Werner Jentsch）は「新約聖書は他の問題に対してと同じく、教育問題に対しても思いがけない答を出すものである⁽²⁾」という。彼によれば、原始キリスト教は、特定の教育学に材料を提供するような意図をば基本的にはもたないことをわれわれは知るべきであり、むしろ逆に、新約聖書は教育問題については、新約聖書としては固有であるが、教育学的にはつかみがたい答——これこそ、まさしく新約聖書的な答なのであるが——、つまり、人生のすべての問題に対して新約聖書が常に与えることになっているその答を与えるように思われる。そこで、新約聖書の教育の問題が全く新しい光のなかで探究されてゆくこと、及びその探究を通して、教育学的な問題が最終的には一つの神学的な問題のなかに変わっていくことはとりわけ重要である、というのである。私はこのイエンチの指摘を非常に意味深いものと思うと同時に、キリスト教の教育概念の探究という仕事の困難さを改めて感ぜざるを得ない。

このようにみえてくると、キリスト教はもとも子供の教育とか、人間の形成の問題に対しては必ずしも本来的な意味での関心はもたなかったといえるようである。それならば、後代の教育の発展のなかで、キリスト教が果してきた大きな役割はどう理解すればよいのか、という問題も出てくる。しかし、この問題はまた別の機会に論ずることにして、本稿では最初に書いた私の問題意識から出発し、キリスト教の教育概念を探究する仕事の一部として、キリスト教の最初の時代——原始キリスト教が教育をどのように理解していたかをとくに調べることにする。

ところで、キリスト教はユダヤ教を母宗教としてその環境のなかに生まれ、ユダヤ教の遺産を継承しつつ、しかもそれを超える新しい宗教として、紀元三〇年頃から二世紀の終りにかけて、当時のギリシャ・ローマ世界のなかに発展していった。従って原始キリスト教、ことに新約聖書の世界は旧約聖書的なユダヤ教と、ギリシャ・ローマ文化の両者によって規定されるところが多いといわれる。⁽³⁾ 原始キリスト教の教育思想を明らかにするために、この論文でとくに研究してみたいことは、パイデア (paideia)⁽⁴⁾ の概念についてであり、この言葉がギリシャ・ローマの世界では主として「教養、形成」(Bildung) の意味に、それから旧約聖書的なユダヤ教の世界では主として「懲戒、懲罰」の意味に考えられていることを概観し、さらにこれらがキリスト教のなかにひきつがれた時に、そこでは両者の各々の意味を反映させながらも、新約聖書のなかでは独自の新しい意味を獲得するに至ったことをとくに究明してみたいと思う。

(1) 初代教会の信徒たちの教育や子供に対する理解の仕方についてのこのような観点は、高崎毅「キリスト教教育史概観」(キリスト教教育講座第二巻「キリスト教教育の原理」所載)によるところが多い。またキリスト教の児童観については同氏の「新約聖書の児童観」(「聖書の世界」三四号所載)がある。

マタイ一八・六の「これらの小さい者」は単に子供だけを指すのではなく、自分たちの信仰の本義を理解せず、それ故に、一方では罪に容易に陥り、他方では自己を義とする独断におちこんだ教会内の弱い人々のことであるとし、マタイにとっては現実の子供は第一義的な関心ではなく、ほんの「ついでに」扱っているだけなのだという解釈もある (S.E. Johnson, *The Gospel According to St. Matthew, Exeg. in "The Interpreter's Bible,"* Vol. 7 p.467)。

(2) W. Jentsch, *Urchristliches Erziehungsgedenken, Die Paideia Kyriu im Rahmen der hellenistisch-jüdisch Umwelt.* (1951) S. 140. 本書はドイツの学界では高く評価されているが、わが国ではまだ余り紹介されていない。イエレンチは一九一三年ザクセン州ケムニッツ生れの神学者。しかし経歴では戦中戦後を通じ YMCA 関係の書記や従軍牧師、委員など実践的活動に一貫して従事している。私は本書に接してキリスト教教育の研究に一つの大きな示唆を与えられた。

(3) 石原謙「基督教史」、第一章 原始基督教の項による。

(4) パイディアについては、イエーガーの名著がある。W. Jaeger, Paideia. Die Forschung des griechischen Menschen, I—III, (1934, 1944, 1947) 本稿では部分的には参考したが、イエーガーの研究は別の機会に譲った。今回は主としてイエーガーの前掲書と、G・キッテルによってはじめられ、その死後はG・フリードリッヒによって編集が続けられている「新約聖書神学辞典」(Theologisches Wörterbuch zum Neuen Testament) 第五卷所載の *παῖδες* (v. G. Bertam,) の項とを手掛りにし、参照しながら、パイディアについて調べた。その他に L. J. Sherrill, The Rise of Christian Education, (1944) H. I. Marrou, A History of Education in Antiquity, (1956) (tr. by George Lamb) も有益であった。

1. ギリシャ的パイディアの形成

ギリシャ語の *παῖδες* という語は、ごく一般的には、子供の養育とか取扱を示すものであるが、そこから教え、指導、指導の意味をおび、さらにある一定の強制、訓練、あるいは懲戒という意味すらもつようになった。*παῖδες* はこのように教育と陶冶のすぎる道 (der zurückzulegende Weg der Erziehung u. Bildung) という意味に使われるが、また別の観点から到達すべき目標 (das zu erreichende Ziel) という意味にも使われる。このようにギリシャ語の *παῖδες* の意味は、ごく概括的にみても多義多様であることが判るだろう。

ところで *παῖδες* があらわれた一番古い箇所はアイスキュロス (Aischylos, 前 525—456) の作品で、そこでは *τρεφὴν* (子供の養育 *kinderzucht*) の意味に使われている。つまり、パイディアはもともとギリシャ人にとっては、常にひとつの成長の過程、発育の過程をいいあらわし、ドイツ語の *Erziehung* (教育)、あるいは *Ernährung* (養育、扶養) に当る言葉として考えられていたわけである。

ソフィストがあらわれる迄のギリシャ世界では貴族であることや血統などが必要関心事であり、すぐれた人というものとは家柄と地位によって決定された。勇気とか才能とか節制とかいう人間的な徳も、すでに身分によってすぐれて

いる人たちの上に冠せられる徳であつて、それだけで独立の徳としては存しなかった。 *ῥέσσειν* もまた倫理的な性格よりもむしろ生物的、植物的な性格をもつものであつた。抒情詩人ピンダロス (Pindaros, 前522—442) は、当時すでに高く評価されていた *διδάχῃ* (教え、教訓、Lehre, Unterricht, Belehrung, teaching, Doctrine) に対して異議を唱え、先天的生得的なものと、後天的に教えられて身についたものとを比較対照し、前者を価値なきものとした。⁽²⁾ またメガラ⁽²⁾の貴族でいわゆる貴族主義理想の先駆者として知られている教訓詩作者テオグニス (Theognis 前544—頃活躍) も劣った人間からの教えは何らよき教えになることはできないという確信をもっていたといわれる。

しかし、成人によつて社会の慣習、習俗、法律が若い世代に伝えられるという意味での教育は、もちろんギリシャ世界においてもごく一般的にみられたことであり、家柄や社会的地位や職業のちがった多くの若者たちに対し、ごく自然な形で行われてはいた。それがソフィストの出現によつて、さらに著るしく活潑化するに至つた。ソフィストたちは、従来の支配的な貴族主義的解釈に反対を唱え、すべての人間が平等の権利をもち、人がすぐれた人として差別されるのは、特権によらず、ただ人間的に卓越した性質、つまり人間的な徳によると説いた。⁽³⁾ ここから人間の陶冶可能性 (Bildungsfähigkeit) の問題が出てきたのである。かくしてギリシャ的パイディアの概念の形成がソフィストによつて始められるに至つた。⁽⁴⁾

パイディアがドイツ語の *Bildung* (陶冶、教養) の意味、とくに精神的教育という意味をもつようになったのは、大体紀元前五世紀後半の頃からである。パイディアは *kalokagathia* (善美 *καλοκαγαθία*, *καλός καὶ ἀγαθός*) が精神的にも肉体的にも理想的に形成されることの意味になり、すでにイソクラテス (Isokrates, 前436—338)・プラトン (Platon, 前427—347) の時代には、この観念は新らしく固定されたものとなっている。たとえば、イソクラテスはその代表作である「オリンピア大祭演説」 (Panegyrikos, 前380) のなかで、遺伝的な素質ではなくて、後天的な教養、つまり *Bildung* (こゝがギリシャ人⁽⁵⁾を形成するという命題を立てている。けれどもパイディアの概念に古典的な意味づけを与えたのはプラトンであつた。パイディアを通じて人間を形成することが彼の関心事の特徴であつた。学芸 (*μουσική*) と体育 (*γυμναστική*) とはギリシャことにアテナイの伝統的教育内容として尊重されてきたも

のであったが、プラトンはこれを採用し (Resp. II 376 e ; Leg. VII 795 d) 学芸は精神の調和的な発展をはかり、体育は身体の調和的な発展を達成し、両々相まって心身の調和的な発展をはかることができると考えた。また彼はいわゆる職業教育や職業的訓練はパイデアと呼ばれてはならないと区別し、さらに算術 (*Ἀριθμητική*) を科学的教育としておこない、これによって表面的現象にのみとらわれず、その根底にある本質的なものを認識するように導かねばならぬとした。そして以上の学芸、音楽、科学を人間教育の予備的段階の教育として与えた後、さらに高次の弁証法 (*διαλεκτική*) を学ばせることによって一切の存在および認識の根源である善のイデアを認識するに至るのであって、これこそがパイデアの本来の意味であるとした。プラトンにおいてはパイデアは精神的陶冶であり具体的には、理想国家の統治の任に当る哲学者の精神的教育を意味していた。彼がパイデアの説明をしている箇所 (Resp. VII 518 c ff) で、曲解の技術としてのソフィストの教育論と対決して次のようにいう。「彼らの主張は、もし魂のうちに知識がないなら、盲の眼に視覚を入れてやるように自分たちがそれを入れてやるというのである。ところが、各人がものを学ぶのに用いる能力と器官は各人の魂のなかに内在していて、それはちょうど眼が身体全体と一緒にでなければ、暗いものから明るいものへ向うことができないように、魂全体と一緒にでなければ向きを変えることはできない。だからそれは魂と一緒に、生成するものから有るものへ転向させられて、遂には、その有るもののうちで最も明るいものを観察することに堪えうるものとなるようにされねばならない。そしてその最も明るいものは善である。従って教育とは、どうすれば最も容易かつ有効にその器官が向きかえさせられるかに関する転向の術なのである。つまり彼に視覚を作り込むのではなくて、むしろ、それをもってはいるが、正しい方向に向いておらず、見るべきものを見ていないものとして、そうするように彼のために手段を講じてやる術なのである」。人間は永遠に対する眼をもっている。彼は正しい方向においてのみみなければならぬ。教育というものは、プラトンにおいては暗闇から明るさへと認識を転換させるものと考えられているのである。

プラトンの後継者として、その思想をさらに発展させ完成させたのはアリストテレス (Aristoteles, 前 384—322) である。彼は「ニコマコス倫理学」 (Ethica Nicomachea) I130 b, 26 で、ノモス (nomos) に照らして方針をたて

るという意味での政治的教育 (die *paideia* ἡ πρὸς τὸ κοινὸν) と、率直に善へと教養するという意味での個人的教育 (*ἡ καθ' ἑαυτὸν paideia*) との区別を立てた。つまり、教育においては、音楽や体育に並んで、読書、談話、書く技術などが必須であるが、これらは勿論生活の有用性のゆえに子供に教授されるのである。しかしながら、さらに一歩進んで、生活の有用性からだけ顧慮することは教育の邪道であって、たとえば音楽について考えてみると、単に生活の功利、有用からよりも、もっと高い目的、つまり音楽は自由で高貴で歓びをもたらすものであり、ギリシャ人の生活に必須の閑暇の享受のために行われるのである。体育もまた音楽とともに幼少時から始めるべきものとされているが、これは精神の円満な発達を目標に行われるべきであって、スパルタのように、ただ体力だけを目的とした教育であってはならないと考える。つまりこの点にわれわれは実人生に対する功利性や有用性から教育を考えるのではなく、真のための真、美のための美、そして人間的教養のための教育という、いわゆる *ἐγκύκλιος paideia* (まとまった陶冶、一般教養) の概念のおこりを見出すのである。⁽⁶⁾ また彼は「経済学」(*Oeconomica*) のなかで、*τὴν περὶ τῆς αὐτῆς paideias* とを比較して、前者は単なる私的要件であるのに対し、後者は公的要件として意味づけている。⁽⁷⁾

以上みてきたようにパイディアの概念は、まずソフィストによってギリシャ的な意味が与えられ、プラトンによって哲学的政治的人間理想へと深められ、さらにアリストテレスによってこれが人間的教養として発展させられた。ところがヘレニズムの世界主義時代となるに及んで、パイディアの概念はさらに拡大され、普遍的陶冶という意味をおびるようになる。⁽⁸⁾ ギリシャ人はもはや特定の都市国家の市民 (*πολίτης*) ではなくて世界市民 (*κοσμοπολίτης*) となり、しかも世界をギリシャ化することによって世界の師となつた。ヘレニズムの人間にとっては、人間存在の唯一の目的は人格の最も完全な発展である。人はすべて自己自身の彫像の製作を自らの基本的な仕事としなければならない。不完全な状態にある自己を高めて、十分に人間であるところの人間へと作り上げていくことが彼らによって努力せられた。これこそがあらゆる人間にとっての生涯の仕事であり、一生をそれに捧げて価値のある仕事なのである。従ってそこではパイディアは子供が一人の人間になるというこのために、人生の早い時期に整えられ用意せられた技術のようなものではなく、人間的理想をより完全に実現するために、生涯を通じて続く教育的努力の結果を意味するよ

うになった。そしてパイデシアはやがて十二分に発展せられた精神とか、あるいは真に人間になったところの人の精神という意味において、文化を意味するようにすらなかった。勿論、この意味でのパイデシアはもはや教育のように何か積極的で準備的なものという意味においてはなく、文化という言葉が今日のわれわれに対してもっているような、何か完全にされたもの、完成されたものという意味においてはである。のちにローマのヴァロ (Varro, Marcus Terentius, 前 116—27) とキケロ (Cicero, Marcus Tullius, 前 106—43) がパイデシアのラテン語訳に *Humanitas* を使ったことは、これに関連して注目し価値することだと思う。

(1) 「テバイに向う七人」(Hepta epi Thebas, 前 467) 18. W. Jaeger, *Paideia* I 25, II 367 A82. イェーガーはギリシャ文化の起源研究の手掛りとして、パイデシアという語の歴史を調べることは重要なことかも知れないが、今のところこの語は紀元前五世紀以前には見られないから、事実上は不可能であるとし、明らかに新資料が発見されて、もっと古い時代にパイデシアという語を見出すことができたとしても、やはり我々にとっては同じく不可能なのである。何故なら、パイデシアが最初に使われた五世紀初め頃は、それは「養育」という狭い意味しかもたず、後の時代のもっと高い意味は全然持っていなかったからである。従ってギリシャ文化の歴史的研究の手掛りとしてもっと自然なのはアレテー(arête)の概念の歴史を調べることであるといっている (I, S. 25.)

(2) ピンダロスは第三ネメア勝利歌のなかで次のようにいう「生れつき高貴な人は非常に強いが、教えをうけて学んだ人はぱっとしないで、心がいつもゆれ動き、しっかりとした足どりで進めない、不安定な精神でいながら道徳を無数に口にするだけ」(W. Jaeger, a. a. O., IS. 287.)

(3) ソフィストによるパイデシア概念については W. Jaeger, a. a. O., IS. 364—418. 田中美知太郎「ソフィスト」によった。

(4) ソフィストの感化をうけた悲劇詩人のエウリピデス (Euripides 前 485 頃—406 頃) は「アウリスのイフィゲネイア」(*Iphigeneia he en Aulidi*, 405) の中で、ある程度までは少く共教養は後天的にかちとられることができるものだといいっており、同じ悲劇詩人のソフォクレス (Sophokles, 前 496 頃—106) もまた *paideuein* を一般的に意見や態度の感化として用いており、「フィロクテテス」(*Philoctetes*, 前 409) では、悪い感化の形成力について談じている。

G. Bertram, *παιδεία* A 1 a, S. 597.

- (5) イェーガーは前掲書Ⅱの約三分の二、Ⅲの大部分をプラトンの敘述に当てた。その意味でもパイデア概念の探究にはプラトンの哲学や教育思想の研究が前提とされる。

「ギリシヤ的な教育概念の形成、とりわけプラトンの形成には、カントの関係がある。『人は教育せられねばならぬ所の唯一の被造物である、教育とは即ち養護 Wartung または扶養 Verpflegung, Unterhaltung 訓練 Disziplin, Zucht 教授 Unterweisung と並んで陶冶 Bildung を意味する』、陶冶という表現は、一つの神秘主義的敬虔主義的概念 (ein mystisch-pietistischer Begriff) で、一八世紀の後半以降はじめて一人の人間の精神的・生活の形成について用いられた」(G. Bertram a. a. O., S. 597 A. 5.) ヘルトラムは右の言葉を R. G. Bury, *Theory of Education in Platos Laws*, *Revue des Etude Grecques* 50 (1938) 304—317. によって引用しているが、同じ指摘が森昭「カントの教育思想の研究——その哲学的背景と批判的再構成——」の中に見られる。そこでは、ドイツ教育を特徴づけているドイッチェ・ビルドゥンク (die deutsche Bildung) の觀念の探究は、その根源を近世の初期いやヨーロッパの古代や中世にまでさかのぼって見出すことにより進められるべきであるが、しかし勝義のドイッチェ・ビルドゥンクの觀念を生み出したのは、一八世紀七〇年代から一九世紀三〇年代に及んだ所謂ドイッチェ・ベウエーグンク die deutsche Bewegung であって、この「運動」によって初めて、特にドイツ的 spezifisch deutsch なるビルドゥンク (陶冶、教養) の觀念がいちおうの完成を見た、といわれている。

なお、プラトンの教育思想については多くの研究があるが、私は Ernest Barker, *The Political Thought of Plato and Aristotle*, (1959) は非常にすぐれたものであると思っている。邦語文献では、白根孝之「プラトンの教育論」稲富栄次郎「ギリシヤの教育」(教育学テキスト講座Ⅴ「西洋教育史」所載)、山本光雄「プラトン」などを参照した。

- (6) W. Jentsch, a. a. O., S. 29. アリストテレスが子供は有用な知識 (技術をふくむ) を学ばねばならぬといっているが、しかし徳を高め、その実現を可能にするような知識や技術にかぎらなければならないといったのは、その陶冶価値に目をつけていることを明らかにしている。しかもそのような知識や技術が、「自由人にふさわしいもの、その知識や技術 (ἐλευθερία ἐπιστήμη) 」とよばれたことが重要なのである。このことばから、のちに自由な技術 (自由学芸) という概念

が成立してきたのだが、職業的実用の技術がその有用性のためではなく、人間の内面的な能力や徳を育てるものになる必然的傾向をものがたっている。この間の経緯については、勝田守一「学校の機能と役割」(岩波講座「現代教育学」第2巻)一二三頁を参照。また三木清「アリストテレス」(「三木清著作集」第9巻)二二八頁にも同じ指摘がある。

(7) イェーガーは、アリストテレス以来パイディアはポリテイアの本質的な構成要素となったし、今日でもギリシャ語の *politeuma* の概念には *Bildung* が含まれていることを指摘している。(W. Jaeger, a. a. O., I S. 511 f.)

(8) ヘレニズム時代の教育理想については H. I. Marrou の前掲書、第二部に詳しい。ヘレニズム時代になると、従来の都市国家は全く組織的性格を失ってしまい、運命の玩具となった。運命の女神 テューケー Tyche は都市国家の古い神々の光輝を失われ、偉大なる女神となった。国家には最早人間が生きてゆく人生や世界に意味を与えるような訓練を与える権威はなくなってしまった。ここから個人に専らの関心が向けられ、世界市民になることが要求されるに至るが、この *κοινωνία* という語は少く共ローマ帝国の最盛期までは、消極的であって、人類の具体的な結合についての積極的な肯定というよりは、たんに都市の束縛をはなれそれをこえてゆくことを意味したにすぎない。(p. 98.)

2 旧約聖書の教育理念

ギリシャ・ヘレニズム世界と並んで、新約聖書の教育思想に影響を与えているものは、旧約聖書のユダヤ教的要素である。⁽¹⁾よくいわれるように、聖書は元来、人間の教育とか、宗教的倫理的陶冶については余り多くを語っていないのである。しかしながら、ユダヤ民族は東洋の中国民族とともに、その民族性を伝えることにおいて最も成功した民族であるといわれ、世界においても最も教育的な民族であることは、すでに多くの人々によって認められているところである。そしてこれがすでに紀元前七世紀の申命記に明らかにあらわれているのである。

申命記の表題 (Deuteronomy, Deuteronomium) は、五書(創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記)の他の書名と同じく、七十人訳 (Septuaginta) からとったもので、「第二の律法」(律法の繰り返し、Wiederholung

るための賜物であるとのべている。

神に選ばれたイスラエル民族にとって、神の要求に従わないことは罪であった。彼らは神への形式的義務的な服従を拒否した。そして神への服従の根拠を「神が先ず我々を愛したので、我々も神を愛する」という点においた。彼らはまた、その子供が神の賜物であることを信じ、それ故、神に向けて彼らを教育することに最大の責任を感じた。そしてこの場合、子供に対する彼らの教育の責任は、近代的な児童の人格尊重の考えによるのではなく、実は神と民との契約によるのであった。神の契約——つまり、律法——への服従は、民族の責任としてうけとられており、子供の教育もまたこの意味での責任であった。かくして律法はひとつの教育力となる。具体的には、十誡（出エジプト二〇・一—一七、申命記五・六—二一）や律法儀式（ミカ六・六—八）のような律法を簡単に要約したものが用いられた。このようにして、イスラエル民族は神に選ばれた民として、その共同体の新らしい成員を常に新たにこの契約の担い手として正しく教育する責任を忘れることなく、実際問題としては、その責任は家族に課せられていることを自覚していたのである。

大体以上のような概観で、キリスト教の母宗教であるユダヤにおける教育理解の一端が明らかにされたと思うが、次に旧約聖書のなかで教育に相当する言葉がどのように使われているかを調べてみる。

ドイツ語の *erziehen*（教育する）に対応するものとして最も多く使われている言葉は、*jsr pi = züchtigen* である。通常これは純粋に身体的な懲罰をさしている。例えば、長老が、その妻を誹謗する若い男を撃ち懲らし（申命記二二・一八）、さそりをもって懲らしめる（列王記上一二・一一、一四）、わがままで手に負えない子が、父母の言葉に従わず、父母の懲らしめにもきかない（申命記二一・一八）、父親がその子を懲らしめる（箴言一九・一八、二九・一七）、というような場合がこれである。ところが旧約聖書においては、この懲らしめがヤーウェ（神）に転用されているところに注目すべき特徴があると思う。これはとりわけ申命記のなかによくあらわれている。「あなたはまた人がその子を訓練するように、あなたの神、主もあなたを訓練されることを心にとめなければならぬ」（申命記八・五）。イスラエルの民は四〇年間の荒野彷徨の旅において経験したさまざまな出来事を通じて、彼らの知り、かつ従わね

ばならぬ幾つかの重要な真理を学んだ。荒野の苦難は神の怒りでも失敗でもなく、神の摂理としての訓練であった。「苦難の訓練的価値は、たんに苦しみにあうという意味だけでなく、(旧約聖書においても新約聖書においても)生起したことの意味を理解するという意味にある」。神の訓練は、たんに人を苦しめるためではなく、常に愛の心から出ているのである。これは後にのべる新約聖書のヘブル人への手紙における「愛する者を訓練し、むち打たれる神」(二・六)を想起させる。

ヤーウエは言葉を語ることによって、その民を正しい道へ導こうとした。しかし、ヤーウエは「神の教育者」として激しい力をもつて民に働いた。そこで民が不従順であるとき、ヤーウエは人々の罪を七倍重く罰しようとする。レビ記二六章にはヤーウエへの服従に対する祝福(三一―三三)とならんで、不従順に対する五つの威嚇(一四―三九)が与えられているが、この箇所では *ysr pi* と罪とが対応関係におかれている(一八、一八)。この懲らしめ、罰も、人間の罪に対する神の審判の厳しさを示すが、その背後には民に対するやみ難い慈愛が光っていると見るべきであろう。さらにエレミヤ書では *ysr* はもっと罰の性格をおびている。「あなたの悪事はあなたを懲らしめ、あなたの背信はあなたを責める」(二・一九)。イスラエルがアッシリヤからもエジプトからも攻められ、みじめな憐れむべき国になり下ってしまったのは民の不信の結果に他ならない。彼らは、ヤーウエこそ、自らが立つべき唯一の精神的立場であることを忘れ、神の民としての自主性を失い、その自由を奪われてしまった。そのためイスラエルは、あるいはナイルの水を汲もうとしてエジプトに下ったり、ユーフラテスの水を飲もうとしてアッシリヤに行ったのである。「このような惨めなユダの姿そのものが、ユダの悪と背きの罰なのである。罪の所罰は何か外的な災禍にあるのではない、災禍をうけつつその意味を悟らず、その罪を離れ得ざる状態、罪を棄て得ず、罪に罪を増し加えてゆくことの中に罪の所罰がある。罪自身の中に罪の罰があるというこのエレミヤの見方は深い」²⁾。また、他の箇所では救いのために遂行せられた教育という意味に使われている。「主よ、わたしを懲らしてください。正しい道にしたがって、怒らずに懲らしてください。さもないと、わたしは無に帰してしまおうでしょう」(一〇・二四)。「主は言われる。わたしはあなたと共にいて、あなたを救う。わたしはあなたを散らした国々を、ことごとく滅ぼし尽す。しかし、あなたを滅ぼし尽

すことはしない。わたしは正しい道に従ってあなたを懲らしめる。決して罰しないではおかない」(三〇・一一)。エレミヤは自己の罪の深い認識の中から尚神にすがり、神のこらしめを受けて神に従い得るものとされたいと切に祈った。神の怒りの下に己れを低くしつつ、神に信頼し、神に訴えている真に敬虔な魂の姿がここに見出される。このような時神の義は神の憐みとなるのであり、義という言葉が後代に憐みの意味で用いられるに至った最初の萌芽がここにある。神にこらしめられなければ自己は神に従順であることはできない。にも拘らず、人間は神の所罰を当然と思いつながら、自らの弱さを知る者として神の怒りが自己を永遠に滅すことを恐れている。しかしながら、神の所罰の中に神の怒りでなく、神の恵みと憐みを見出すことが神への真の信頼の途なのであり、その時には、神の義しさはそのまま神の憐みとなる。三〇章には、イスラエルの罰せられたのは愛の懲らしめであった、という慰め深い、美しい思想が見られ、ここでもやはり新約聖書のヘブル人への手紙一二・七を想起させられる。

musar は年長者によって行われる純粋に肉体的な懲らしめがもともとの意味であった。箴言は懲らしめのむちについてしばしば言及している。「愚かなことが子供の心の中にながれている。懲らしめのむちは、これを遠く追い出す」(二二・一五)。「むちを加えない者はその子を憎むのである。子を愛する者は、つとめてこれを懲らしめる」(一三・二四)。「子を懲らすことを、さし控えてはならない、むちで彼を打っても死ぬことはない」(二三・一二)。むちを使うことは、教育の過程の一部としてすすめられている。「望みのあるうちに、自分の子を懲らせ、これを滅ぼす心を起してはならない」(一九・一八)。ところが *musar* の場合もまた、これが転用されてヤーウエの苛酷な懲らしめの処置となる。「主よ、彼らは悩みのとき、あなたに求めた。彼らがあなたの懲らしめにあったとき、祈をささげた」(イザヤ二六・一六)。「あなたの愛する者は皆あなたを忘れて、あなたの事を心に留めない。それは、あなたのとがが多く、あなたの罪がはなはだしいので、わたしがあだを撃つようにあなたを撃ち、残忍な敵のように懲らしたからだ」(エレミヤ三〇・一四)。また有名な第二イザヤは懲らしめの下に服している主の僕をみた(イザヤ五二・一三—五三・一二)。ホセアではヤーウエをば懲らしめの執行者とよぶ。「彼らはシッテムの穴を深くしたが、わたしは彼らをことごとく懲らしめる」(五・二)。他方、申命記は *musar-jhuah* によって、エジプトで苦役にあるイスラエルを率いる

神の導きを理解している。ヤーウエを教育者として取扱う態度が申命記の中ではっきりとあらわれている。

エレミヤの場合は、民の懲らしめが主として考えられているが、知恵文学(箴言、伝道の書、ヨブ記、詩篇の一部)では、もっと個人の教育に関心が払われている。⁽³⁾そして *musar* の語義が知恵文学においては、懲らしめの意味よりはむしろ教訓、身のこなし、陶冶の意味をおびている点に注目しなければならない。「これは人に知恵と教訓とを知らせ」(箴言一・二)「教訓をかたくとらえて、離してはならない、それを守れ、それはあなたの命である」(全四・一三)「真理を買え、これを買ってはならない、知恵と教訓と悟りをも買え」(全二三・二三)。元来、訓練とか懲戒を意味する *musar* がここでは知恵という言葉と平行して、訓練の結果、ないしは賢者の教えに服して得られた教訓の意味に使われている。人はその精神を支配し、また精神に害を与えようとする本能や衝動を備えているが、賢者になるためには一そう高い権威——父母、知者、神、——に服することを学ばねばならない。そこでこの用語例で、*musar* はいわゆる教育という概念に最も近い言葉となるのであるが、しかしやはり、知恵文学においても家族の日常生活における刑罰的性格、または秩序的性格を示しており、むしろこの意味の方が本来的な形のようなのである。そこで *musar* もまた人間同志、神と人間との間の一定の秩序のなかにおける禁止に関する事柄である限り、ギリシャ的なパイディアのように理想的な教育目的への到達というような意味をもつことは少くなるのである。

この他にも、教育的行為を叙べるために旧約聖書は異った表現をしている。例えば *gadal pi* (成長させる) *rabah pi* (大きくする) *nun pi* (強くする) などである。「わたしは子を養い育てた、しかし彼らはわたしにそむいた」(イザヤ一・二)。「わたしは苦しまず、また産まなかった。わたしは若い男子を養わず、また処女を育てなかった」(全二三・四)。「わたしが、いだき育てた者をわたしの敵は滅ぼし尽した」(哀歌二・二三)。「あなたの母はししのうちにあって、どんな雌じしであったろう。彼女は若いししのうちに伏して子じしを養った」(エゼキエル一九・二)。「そして王は王の食べる食物と王の飲む酒の中から、日々の分を彼らに与えて、三年のあいだ彼らを養い育て、その後、彼らをして王の前に、はべらせようとした」(ダニエル一・五)。これらに共通しているのは、本来の教育がいわれているのではなく、養育 (*großziehen*) についていわれていることである。従ってここでは教育の目標とか理想とかに関しては

考えない。これまで幼少であったものは、大きく成長しなければならない。養育ということは人間の成長の過程になくてはならないものとして考えられていたのである。

(1) 旧約聖書の教育思想の研究についてはイエンチも指摘しているように、従来からも若干のすぐれたものはあったが、

それらは要するに具体的な個々の問題の取扱いが、神学的基礎づけに終始したうらみがあった。(W. Jentsch, a. a. O., S. 85) 大体旧約聖書自体が大部な文書であり、しかも体系的な性格をもつものではないから、包括的に叙述することは無理なことである。その上、私自身は聖書学や神学の専門的教育をうけていないため、イエンチの批判に答えるような研究方法がどういうものか、よくわからない。けれどもベルトラムやイエンチの試みた研究を参照し、その他旧約聖書の中でとくに教育の問題に深い関心を払っているところの申命記、エレミヤ書、箴言などの相当箇所を調べてみて、この問題のごく輪廓だけでも明らかにしたいと思ったのである。

(2) 関根正雄「預言と福音」五九号八頁。エレミヤ書の註解や解釈は、主として同誌に連載された「旧約改訳と註解 エレミヤ書」と、浅野順一「真実——予言者エレミヤ」によった。

(3) 知恵文学にあらわれた教育思想については、平塚益徳「旧約聖書の教育思想」がある。これは同氏の若い日の労作であるが、最近も版を新たにして出版されている。

3 新約聖書におけるパイディア

新約聖書のパイディアの概念は、新約聖書がおかれている周囲の環境、つまりユダヤ教とギリシャ文化のそれぞれのもつ特徴によって色づけられている。そしてやがておのずから新約聖書独自のパイディア概念があらわれてくる。

まずパイディアが「教えられた教養」(eine unterweisende Bildung)の意味では、使徒行伝のモーセとパウロの受けた教育にふれた二箇所があるだけである。「モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、言葉にもわきに

も力があつた」(七・二二)。「わたしはキリキヤのタルソで生れたユダヤ人であるが、この都で育てられ、ガマリエルのひざもとで先祖伝来の律法について、きびしい薫陶を受け、今日の皆さんと同じく神に対して熱心な者であつた」(二一・三)。これによればモーセの場合は純粹に知識的教育を、パウロの場合は宗教的教育を考えているようである。けれどもこれらの用法は純粹にギリシャ的な当時の用法であり、ヘレニズム世界で伝記が書かれたり、ギリシャ化されたユダヤ人が偉人の生涯を叙べるときに、ごく普通に用いられたものである。

これに対して旧約聖書的な意味においてはパイディアはかなりしばしば用いられている。通常、新約聖書では神が教育者として現われるか、人が教育者としてあらわれるかのどちらかであるが、前者の場合は例外なしに神ないしイエスがキュリオス(主 *κύριος*)として示されている。従ってパウロによれば一般的にキュリオスの懲らしめの行為について叙べられている。「しかし、さばかれるとすれば、それは、この世と罪に定められないために、主の懲らしめを受けることなのである」(Iコリント二・三二)。「人に知られていないようであるが、認められ、死にかかつているようであるが、見よ、生きており、懲らしめられているようであるが、殺されず」(IIコリント六・九)。とくにこの後者の箇所は、パウロがいかに旧約聖書的なパイディアの理解を自らの生きた思想世界に対して実り多いものにしてしようとしたかをよく示している。パウロはここで自分にとっては休むことのない神への奉仕のみがある、ということとをあらゆる境遇の中で自分は意識しているのだという点を証明した。とりわけ、彼は自分を「懲らしめられているもの」(*παιδευόμενος*)と呼び、同時にしかしながら「殺されない者」(*καὶ μὴ θανατούμενος*)と呼んでいる。彼によればパイディアは死(*θάνατος*)へいたる必然性をもった事柄であつた。ひどい懲らしめが死へ導くことは当時では自明のこととされていた。従って「懲らしめられているもの」はこのことを考慮に入れて読まれねばならない。そしてこのような把握は詩篇にある「主はいたくわたしを懲らされたが、死にはわたしを殺さなかった」(一一八・一八)という旧約聖書の最も基本的信念と見事に対応していると思われる。原理的には懲らしめと死とは同一線上に属するものである。そしてこの点について、パウロの思想の前提となっていたものは次のようなものであつた。教育つまり懲らしめは刑罰のようなものである。というのは、人間には制すべき罪、斗わなければならない罪というものがあるから。

そして懲らしめは本来的には生命を得させるために行われるものである。他方、懲らしめというものは究極的になら、死を通してのみ生命を得させるように働くものであった。それ故に律法を必要とする。しかしこの律法はたとい生命へと定められていても、無論死ぬものである。パイディアはこうした意味において懲戒のようなものなのである。⁽¹⁾

またヘブル人への手紙には、個々人に神のさいわいをもたらす懲らしめがあらわれている。「主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子をも、むち打たれるのである」(一・二六)。ヘブル人への手紙のなかでは、著者はうむことなくきびしい懲らしめの背後に神の温かな心情の鼓動を示そうとしている。そこでわれわれは黙示録の「すべてわたしの愛している者を、わたしはしっかりと懲らしめたりする」(三・一九)を想いおこすのである。

次に新約聖書におけるパイディア理解のギリシャ的な系統を明らかにしよう。いわゆる牧会書簡にはパイディアがよくあらわれるが、なかでもテトス二・一一以下とテモテへの第二の手紙二・二五はギリシャ的色彩を明らかにしている。「愚かで無知な論議をやめなさい。それは、あなたが知っているとおおり、ただ争いに終るだけである」(Ⅱテモテ二・二三)。この手紙の受取人は、愚かで「無知な論議」(ἀραιοῦτοι ἐν ᾗσιν)から脱却しなさいと勧告されている。「無知な」(ἀραιοῦτος)は「愚か」(μωρὸς)と並んで、ヘレニズム的な「無教育、未開」(ungebildet, dumm, kindisch)という意味である。争いへ導く論議は「教育ある者、教養をつんだ者」(Gebildeten)に値しない。従って、パイディアの概念としてここでは *Bildung* が根底にあることが判る。この他に「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である」(全三・一六)という箇所も無視してはならない。⁽²⁾ つまり、ここでは「義の教育」(παιδεία ἢ ἐν δικαιοσύνῃ)が話題になっているが、ここではまさに人間の倫理的完成という意味において教育の目標が形成されているのを見るのである。パウロはこの箇所では単に形式的にのみならず、実質的にもまたヘレニズム的教育理解を採用したのである。これに関連してピリピ四・八の「徳の目録」(ἀρεταὶ-Katalog)を考えてみよう。彼はここでもヘレニズム的な陶冶理想を採用している。「すべて真実なこと、すべて尊ぶべきこと、すべて正しいこと、すべて純真なこと、すべて愛すべきこと、すべてほまれあるこ

と、また徳といわれるもの、称賛に値するものがあれば、それらのものを心にとめなさい」。ここに列举してある八つの徳目はすべて当時の一般の社会で尊重されていたもので、とくにキリスト教的なものではない。パウロは異邦人の中にある良いものは、これをとってキリスト者の模範とすべきことを教えた。このことは「この世と妥協してはならない」(ロマ二・二)と彼が他の箇所⁽³⁾で勧めたことと矛盾なく成立するのだろうか。たしかに新約聖書の中で、福音がこの箇所ほどギリシャ思想に接近している所はない。しかし、パウロはここで両者を結合させて何か新しいものを作ろうとしたのではなかった。彼は人間的に真であり善であるすべてのもの、それが異邦人によって尊敬されており、また異教徒の生活を正しくしているものであっても、それをキリスト者もまた尊敬するように命じたのである。それは、キリスト者もまたその上に立っている所の一つの前提として見られ、承認されねばならないというのである。キリスト者の生活は教会においても社会においても、およそ主にあって誰もがなすべき手近かな、日常的道德を正直に実践することが重要なのであった。

以上で新約聖書のパイディア概念の旧約聖書のユダヤ教的理解とギリシャ的ヘレニズム的理解とのいくつかの例を明らかにしてきたが、最後に新約聖書に独自の意味でのパイディア概念を考えてみよう。

既に述べたように、ヘブル人への手紙一二章は「主の訓練」(*paideia kyon*)を軽んじてならないことを強く勧めている。この箴言(三・一一—一二)に発する言葉は、いうまでもなく教育者としての神について語っており、信仰生活における苦難は神の愛の証拠と見るのである。ところでこれと同じ言葉がエペソ六・四にある。「父たる者よ、子供をおこらせなさい、主の薫陶と訓戒とによって (*ἐν παιδείᾳ καὶ νομοῖς κυρίου*)、彼らを育てなさい」。これはパウロが家庭についての教えを書き記した部分(五・二二—六・九)の一節で、父親が子供の教育をする際の心得についてふれているところである。従ってヘブル人への手紙の場合とは違って、ここでは人間を教育者として考えていることは明らかである。教育者は父親以外の誰でもない。そしてこの父親は子供に憤りをひきおこすような残酷や、不正をもつてではなく、主に従うものにふさわしいやり方で子供を育てなさい、という。こうした解釈は RSV の *discipline and instruction* (肉体的な懲らしめと口頭の叱責として区別している) という訳がよく示していると思

う。当時のローマ法では家長に対して家族成員の絶対的支配が許されていたが、パウロがここで考えたことは「父親はその子供を懲らしめる (*paideia*) べきであり、また必要な叱責 (*rebucia*) を与えねばならない。けれどもそれらはどこまでもキリスト者にふさわしくせよ」ということで、その意味ではローマ法が与えていた家長の絶対的支配を制限したのである。ローマ法の家長権 (*patria potestas*) では、欲しくない子供の遺棄、成長した子供を奴隷に売る子供の廃嫡、笞で打つ、拘禁、そして死へ追いやることさえ正しい権利であるとされていた。パウロがここで親と子の関係を人格的に対等に扱っていることは、古代社会の個性の確立がまだ十分でなく、民主的になっていたとは思えない時代を背景において考える時、実に大きな意味があったと云えよう。勿論彼は十誡の第五誡を引用して契約団体の中で、子供は父母を敬うべきことを要求している。しかし、敬うということは、当然もつべき栄光と恵みを当の実体に帰することである。そのことは、根本的には「主にあって」神の正しさにささえられてのことなのである。

われわれはこの箇所には「主にあって」神の正しさにささえられてのことなのである。前にも言ったが、ヘブル人への手紙一二章は教育者としての神について語り、この箇所では人間（父親）を教育者として考えている。従って「主の訓練」(ヘブル一二・五)も「主の薫陶」(エペソ六・四)もともに *paideia kypiou* であるが、ヘブル一二・五の *kypiou* は明らかに主語的属格 (*genitivus subjectivus*)——主がおこなうパイディアの意味——としてとらえられるのに対して、エペソ六・四の *kypiou* は性質を示す属格 (*genitivus qualitatis*)——キリストのもつパイディアの意味——としてとらえるべきである。けれどもエペソ六・四がキュリオスの概念をばヘブル一二・五とは違ってキリストを指していることは周知のところ、それ故エペソ六・一は有名な新約聖書の定型である「主にあって」(*ἐν κυρίῳ*) を一つの教育学的な事柄の関連の中に応用したと考えられる。このように見てくると、主のパイディア (パイディア・キュリウ) という形でのパイディアが新約聖書の核心にふれるものであり、エペソ六・四のようにそこには旧約聖書の要素やヘレニズム文化の反映をみるのであるが「主にあって」、つまりキリストの信仰のなかでのパイディアを明示している限り、これこそがキリスト教の教育概念の中心的な意義をもつものといえるだろう。

- (1) IIコリント六・九の解釈については、イエレンチの前掲書一四五—一四六頁によった。この箇所直接の関連はないのであるが、小塩力「パウロにおける『死』」(「キリスト讃歌」所載)は私には非常に有益であった。
- (2) 新約聖書の中で、パイディアをおこなう主体(つまり教育者のこと)として一番多くあらわれるのはいうまでもなく神であるが、この箇所では教育者としての聖書(この場合は旧約聖書)について語っている。またエペソ六・四は父親を教育者としてのべ、テトス二・一二では恩寵のパイディア(*Xapis παιδευσις*)について語り、またIテモテ一・二〇では人間でない教育者としてサタンがあらわれている。
- (3) 「シオンとパルテノン」とにその源をもつ二つの流れが落ち合って立てる波のさざめきを聞くの感がある」(Hermann von Soden)。この箇所の註解は、山谷省吾「新約聖書・新訳と解説I(5)ピリピ書ピレモン書」および福田正俊「ピリピ書研究18」(「福音と世界」一九五七年一二号所載)を参照した。徳(*apert*)はギリシヤ人の好む語であることは既に述べたが、新約聖書ではこの他には数える程しか見出せない(Iペテロ二・九、IIペテロ一・三、五)。福田氏は「心にとめなさい」(八節)についてバルトを引用して次のようにいう。「パウロはここで——ちょうどローマ書一三章においてそうであったように、ここでも——人間的に真であるもの、善であるすべてのもの、すなわち異教徒の生活を——どんな理由からであれどんな仕方であれいつも——訓練し正しくしているもの、或は訓練するもの、正すものとして異教徒から尊敬されているもの、それをキリスト教徒もまた尊敬することを命じている」(K. Barth, *Erklärung des Philipperbriefes*, S. 122—3)。これと同じ箇所、「それらのものを心にとめなさい」について Robert R. Wicks は面白い指摘をする。「パウロはここで印象的な言葉を使っている。しかしこれが英語で *think on* (K. J. V.), *think about* (R. S. V.) と訳されているのは不適當である。この訳では『人の心が常に純粹で高められた思いで占められていなければならぬ』という意味になるのだが、かかる状態はこの上なく望ましい。けれどもパウロのいわんとした要点は、思い(思想)は十分ではないということである。すぐれたものを唯単に思っている(瞑想している)というのは、しばしば人間を弱くし、實際生活の中ではほとんど適合しないローマンの空想にみちびくだけである。パウロが言った言葉の意味は正しくは *calculate* (たとえば職人が仕事にかかる前に注意深く測定をする時のように)、つまりパウロが読者に印象づけようと努めたことは、彼らが一定の正しい行動の基準をもつべきこと、そしていかなる場合にあってこれらがどのようにに應用されるべきかを考えねばならぬということであった」(The Epistle to the Philippians, Exg. in "The Interpreter's Bible" Vol. II, p. 118)。

(4) Francis W. Beare, *The Epistle to the Ephesians*, Exg. in "The Interpreter's Bible" Vol. 10. p. 731—732.

(5) エペソ六・四にある第二格の *κυρίου* について、G. Bertram は主語的属格 (*genitivus subjectivus*) とし、「キリストのおこなう薫陶と訓誡」という意味であり、従って父親を通してキリストがおこなう教育であるという (a. a. O., S. 623)。これはイエENCHの解釈と違っているが、私にはどちらをとるべきかを断定することはできない。しかし、この箇所は父親——子供の関係についての教えであるから、やはりイエENCHのように *κυρίου* は *genitivus qualitatis* もしくは *genitivus limitationis* とし、父親によってなされるキリスト教的な薫陶 (行為を通してなされる教育) と訓戒 (言語を通してなされる教育) とを区別して考えるのが妥当だと思う。そしてイエENCHを注意深く読むと、エペソ六・一の「主にあって」との関連の中で、父親のおこなう *παιδεία κυρίου* も究極的には「キリストがおこないたもうパイディア」であることを思わざるをえないのである。

結

語

おわりにこれ迄のべてきたことを総括してわれわれの問題を整理しよう。新約聖書はそのパイディアの概念に二つの方向をもっている。一つは懲らしめる (*züchtigen*) の意味における旧約聖書的なもの、もう一つは教養・形成する (*bilden, erziehen*) の意味におけるギリシャ的なものである。前者は人間を局限するという点で、より消極的な基本的内容であり、後者は人間を開展するという点で、より積極的な基本的内容である。両方向とも厳密にみるならば正反對の観点に立っており、ユダヤ教とギリシャ文化の各々を目指している。前者は一般的には意志により多くのものを向け、後者は知性により多くのものを向ける。そこで次のように定式化することができる。「懲らしめられる人は倫理的で落ち着いた性格を得なければならないし、教養をうけた人は利口で賢明でなければならない」。けれども、ここで旧約聖書的な方向と、ギリシャ的な方向とを区別する際に留意しなければならないことがある。それは、これら二つの方向は唯単に機械的に区別しようようなものではないということである。たとえば箴言の知者やラビたちはギリシャ的環境の中で *Bildung* の目標を知っていたし、ギリシャ的パイディアもまた、少く共古典時代に体と魂とを

形成する *Zucht* の事実を識っていたのである。旧約聖書のユダヤ教的な教師はただ消極的に懲らしめるだけなのでなく、積極的に具体的に教育しなければならない。またギリシャ的ヘレニズム的教師は陶冶目標へ到達するために強い訓練手段を用いることなく唯単に教育することはできない。両者は簡単に意味を分けられるというようなものではなく、実はもっと深いところに区別が見出されるものである。

旧約聖書のパイディアは神の秩序に身を捧げ、具象的に語り、上から下へという傾向を進める。ここでは抑圧が専ら追求される。懲らしめの刑罰が向けられる対象は、神に服従する人間である。これに対してヘレニズム的パイディアはいかなる場合でも結婚とか家族とか律法とかに関する秩序については余り知っていない。それは結びつけるというよりは解放する方である。その傾向は下から上へである。それは抑圧しようとするのではなく、高めようとして教育するのである。その目ざすところは神への奉仕ではなく、より高い人間性の自由である。ここからギリシャ的認識は世俗的認識であり、使命を人間性の賜物から察知し、人間を形成しようとするものといえる。そしてギリシャ的認識は人間を發展させるパイディア(教育)に到達する。これに対して旧約聖書的な認識では、人間は神の定め秩序の中でみちびかれねばならないという神の意志の下で、人間を限定するところのパイディア(教育)に到達するのである。このようにごく慎重にアクセントを置いたときの相違としてのみ、懲らしめ (*Zucht*) をば旧約聖書のユダヤ教的な概念理解、陶冶・教養 (*Bildung*) をばギリシャ的ヘレニズム的概念として区別することができる。そして新約聖書のパイディアは、それが人間の發展に関するものであると、また人間の限定に関するものであると、孰れの場合にも神の欲したもう人間形成であり教育である。ギリシャ人の創造世界の背後にも、ユダヤ人の律法の背後にも同じ神が立ちたもう。新約聖書の中ではパイディアの二つの概念はすでに述べたように対立する形であらわれているが、しかしそれらは究極的には福音とは特定の関係にあるものと認められねばならない。それらは福音によって批判されると同時に、また福音によって新しい形成を経験するのである。かくして新約聖書独自のパイディア概念がわれわれに明らかとされるのである。

〔この論文の内容の一部は、日本教育学会第一九回大会(一九六〇・五・三)において発表したものである〕

Résumé

The Educational Thought in Primitive Christianity

By

Shigeo Matsukawa

The Christianity came from Judaism and had many inheritances from it. But the Christianity evolved as the new religion which was beyond Judaism among the Graeco-Roman World during the first two centuries. Therefore, Primitive Christianity, especially the New Testament, was much influenced both by the Old Testament or Judaism and by the Graeco-Roman culture. In order to inquire the educational thought in Primitive Christianity, I have tried to examine the concept of the Greek word "*paideia*." The word "*paideia*" was interpreted, on the one hand, as *culture* (Bildung) in Graeco-Roman World and on the other hand, as *chastiment* (Zucht) in the Old Testament or Judaism. In the former, "*paideia*" put on the humanistic tone, and in the latter, to the contrary, the theocentric, disciplinary tone. And then, these two kinds of the concept "*paideia*" were succeeded to the Christianity. The Christian interpretation of "*paideia*", especially the concept "*paideia*" in the New Testament, took the unique significance, namely—"paideia Kyriu."